

## 序

今回、「強皮症の基礎と臨床 ～病態の解明から最新の診療まで～」が発刊されることになり、強皮症診療に普段から携わる先生方のみならず、一般診療に当たられている先生方や研修医などにとっても、大きな福音になるものと確信しています。

強皮症、特にびまん皮膚硬化型の10年生存率は約60%とされ、膠原病の中で最も予後不良の疾患とされています。つまり、強皮症は膠原病の中で血管炎と共に、最後に残された難治性疾患といえます。一方で、国内外の強皮症研究者の努力によって、最近10年間における、強皮症の病態理解と治療の進歩には目を見張るものがあります。例えば、予後を規定する合併症である間質性肺炎に対しては、シクロホスファミドによる治療が標準的な治療となり、最近ではミコフェノール酸モフェチルやリツキシマブの有効性も示されてきました。皮膚効果に対しても、トシリズマブの第三相国際共同治験が行われており、有望な治療法として期待が高まっています。皮膚潰瘍についても、ボセンタンが保険収載になり広く使用できるようになりました。病態については、未だ強皮症の真の病因に迫ることは可能とはいえませんが、様々な免疫異常の解明、血管内皮前駆細胞の異常、転写因子の発現異常に基づいた新規動物モデルの作製など、強皮症の病態を理解するためのジグソーパズルのピースが徐々に集まってきつつあります。

本書は、最近10年間における強皮症の基礎と臨床の進歩を踏まえて、強皮症について、病因、病態、治療、関連疾患まで、すべてを網羅し、強皮症の専門家はもちろんのこと、研修医、医学生、創薬などの研究者に至るまで幅広い層に役立つものと確信しています。また、カラーの症例写真や図版などを執筆者から多数ご用意いただき、ビジュアルでわかりやすい紙面になっていることも本書の大きな特徴です。加えて、臨床の現場に必要な、実的な知識が盛り込まれていることから、明日からの強皮症診療の現場ですぐに使えるものとなっています。診断や病態把握、そして治療選択において困難を伴う強皮症診療ですが、強皮症診療に当たって、常に本書を参照していただければ、きっと新たな糸口や発想が見つかるものと思います。本書が読者の強皮症の理解の一助になればと願っています。

2016年6月

東京大学医学部皮膚科学教室教授  
佐藤伸一